

最澄が七福神の一人であり食物・財福を司る大黒天と出会った場所に建てられている。最澄がはじめて比叡山に登ったとき一人の仙人に出会った。「あなたはどなたですか」と訊ねると、仙人は「人々の苦を取り除き、安穏と、世間と涅槃の樂を与える」という『法華経』の文を唱えたので、最澄は「それでしたら修行する僧侶たちの食生活と健康とこの山の経済を守ってください」とお願いをしたところ、仙人は「毎日三千人の食糧を用意しましょう。私を拝む者には福德と長寿をあたえましょう」と約束されたという。最澄はこの方は大黒天に違いないと思い、身を浄めて刻んだ像が、三つの顔と六本の手を持つ三面大黒天像。最澄の弟子の光定（こうじょう 779 – 858）が最澄作の像をここに祀った。やがてここは事務所や食堂として使われるようになった。

三面大黒天は、正面の食生活を守る大黒天に、左に勇気と力を与える毘沙門天、右に美と才能を与える弁財天のお顔、そして六つの手には人々の苦を除き福を与える様々な法具を持ったお姿であらわされている。今では日本各地で祀られている三面大黒天だが、ここが日本の三面大黒天発祥の地。